

## 記者レポート

齋藤淳 ● フジテレビ報道局外信部

今年は1月27日が丁度モーツァルト生誕250年記念日とあって、年末年始からコンサートの多くは彼の作品で彩られている。そんな中、1月は異彩を放つ公演に行ってみた。2つともヘンデル作品の公演である。

13日浜離宮朝日ホールで行われたのは〈ヘンデル・フェスティバル・ジャパン〉。ヘンデルは2009年に没後250年を迎えるが、それに向けて2003年から毎年集中的に本邦初演曲を中心に取り上げ、ヘンデル作品の「正当な評価」獲得を目的としているという。

この日は前半が合奏協奏曲集より10番と11番、後半は本邦初演の音楽幕間劇（ヘラクレスの選択）が演奏された。合奏協奏曲の10番は、個人的にはCDで聴いたことのあるフルトヴェングラーの重厚な唸りをあげた演奏があまりにも耳に残っていたので、小編成、若手中心の伸び伸びした音楽が非常に新鮮に聴こえ、「この曲はそういう曲だったのか」と深く納得した。実行委員長の三澤寿喜氏は「演奏には若手のエネルギーが必要で、ヘンデルの奔放な情熱と共鳴させたいのです」と狙いを語る。

〈ヘラクレスの選択〉はヘラクレスが「美德」と「快楽」から誘惑を受け苦悩するという非常に分かりやすい筋で、小さなオラトリオみみたいな作品。メリハリのついた展

## 奥深きヘンデルの道を行く

開と聴き応えのある音楽は、多くの人が容易に受け入れることが出来るものだった。ヘラクレス役でカウンターテナーの米良美一が出演したことも、この曲に対する関心を高めたことに貢献したようだ。このフェスティバルの次回は今年の年末。水準の高い合奏と合唱、そしてリストによって現れる一味違ったヘンデル像は、是非とも再び接してみたい誘惑に駆られる。

一方、新国立劇場では中旬に小劇場オペラシリーズの15回目としてヘンデルの〈セルセ〉が取り上げられた。ベルシャ王セルセの奔放な愛に翻弄される喜劇を、今回オペラ初演出となる三浦安浩は街角の公園での〈セルセ〉映画ロケという設定に置き換えた。

舞台は客席の真ん中に置かれ、登場人物に携帯電話・ビデオカメラを持たせた演出は紀元前ベルシャが舞台となるオペラをいわば「力技」で現代の我々の側に引っ張ってきたもの。舞台が真ん中にあるおかげで観客と歌手との距離が非常に近く、小劇場演劇を見ているような臨場感を感じる。舞台上ではここでも若手中心の歌手が懸命な演技と歌唱で応え、絶して清々しさを感じられた。

この演出について三浦は「この物語が持つエッセンスを聴衆に肌で感じてもらうため」と語り、合わせて小劇場スペースでの挑戦と位置付けた。

公演終了後は客席からのプラボーにプーが混じていた。確かに筋と設定の細かい整合性の詰めなどに議論の余地はあるかも知れないが、チャレンジングな演出を行ったその意欲の前では些細な事に思われる。是非とも挑戦を続けて欲しいと思う。様々なアプローチを受けているヘンデル～知られていない奥深さがまだまだありそうだ。



ヘンデル：歌劇〈セルセ〉から  
撮影：三枝近志 写真提供：新国立劇場